

球磨川治水対策に関する最近の様々な問題



導流堤調査(球磨村渡)2019.5.19

ここ10年間の全国の災害史を眺めると、これまで国が進めてきたダムと連続堤防に洪水を閉じ込める治水対策は、災害の拡大に一役も二役もかっているという事実直面します。

洪水被害の多くは、堤防建設に伴う内水氾濫(川にはけ切れない氾濫)です。そればかりか、今年の西日本豪雨災害でも明らかのように、堤防決壊が人命を奪い、ダム放流が人命を奪う事態さえ起きています。

最近、球磨川流域でどこが危険かを国交省・県・市町村の担当者が点検していましたが、氾濫の危険をもたらしているそのほとんどは河道の土砂堆積であり、その土砂の上に繁茂した植物です。このような事態を引き起したのは、連続堤防で川を固定し、洪水を川の中に閉じ込めたからです。

同時に、最近の豪雨災害の多くは山地崩壊から始まっている点に目を向ける必要があります。ところが政府は、林業の経済効果を高めることだけに力を入れています。昨年6月には森林経営管理法を成立させ、民有林の破壊に手を付けましたが、今年6月には国有林法を改悪して森林破壊をさらに押し進めようとしています。

一方で、温暖化で雨量が大幅に増える可能性があるとし、莫大な予算獲得のためだけの治水対策案づくりに没頭し続けています。また、1000年に一度の降雨で人吉市内の大半が水没するなど住民をおどし、水防災意識再構築会議なるものを開催させて「このような大雨にはダムも堤防も一切役立ちません。自治体からの避難指示に従って、自分の命は自分で守りなさい」と言い出しています。この矛盾だらけの考え方の背景には、川の保全よりも、また住民の防災よりも「治水」という名の経済効果最優先の開発の姿が見えてきます。

手渡す会は、これからも「豊かな自然の営みのある球磨川・川辺川を流域住民の暮らしの中に取り戻すこと」の大切さと「川を育み、流域住民の命を守るために生態系の豊かな山地を保全すること」の大切さを訴え続けていきます。

●2018年5月～2019年6月の出来事・活動報告

18. 9. 2 第22回川辺川現地調査。100名参加（人吉市東西コミセン）
19. 1. 14 川辺川ダム反対住民団体新年会。100名参加（東西コミセン）
 2. 24 人吉橋下流左岸の改修工事が完了
 5. 14 球磨川治水対策協議会への意見書を提出
 6. 7 第9回球磨川治水対策協議会、治水対策案の組合せ10案を提示

■洪水調査

2018年6月20日、球磨川の支流である胸川を中心に洪水発生状況を記録。胸川上流の田野地区は人吉で最も降雨量が多い。ある住民の方が「水害は山から来た」と表現されていた。保水力が奪われた山林荒廃を訴える表現である。7月7日には球磨川本流（球磨村から錦町）と川辺川（相良村）の洪水発生状況、特にどこでどのように氾濫しているかを記録した。

■2018年西日本豪雨災害の分析・検討

災害が発生した岡山県の高梁川水系、土砂災害が多発した広島県全域、ダム放流の災害を引き起した愛媛県の肱川全域の雨量や流量の記録と、どのような洪水が発生したかを分析・検討した。開発が自然をどのように破壊し、治水と利水が川をどのように破壊したかの議論を棚上げにして、洪水制御の議論に埋没している限り、治水と災害とのイタチごっこは続く。

■2018年「手渡す会」研究会

11月18日、「過去10年間の災害が曝け出してくれた治水の諸問題」をテーマに開催。すでに河川法そのものが現実の災害に全く対応できていないという矛盾に陥り入りながら、国交省はなおもダム建設のために設定された洪水の数値いじりばかりをやっている。その最も典型的な姿を球磨川治水対策協議会に提示されている治水対策案に見ることができる。現実性のない「空想治水対策」をもてあそんでいる。

■忘年談話会

12月15日の恒例の忘年会では、球磨人吉や全国の最近の豪雨災害や球磨川治水協議会で国交省が提示してきた治水対策案などについて黒田さんが報告。ダム建設のために国交省がつくり出す机上の豪雨、温暖化がつくり出す豪雨などについて、気がつけば7時間以上も議論をしていた。

■2019年新年談話会

恒例の新年会では、「川とはどのような自然か」を語り合う。川は堤防の中に閉じ込めることも、治水の世界に閉じ込めることも出来ない、自然の歴史が育んできた多様性に富んだ豊かな自然であり、流域生態系の要である。

■ドローンで球磨川と川辺川を調査

資料づくりを目的に、レンタルしたドローンによる空中からの球磨川の撮影を実施した。地形図やグーグルアースなどによる写真よりもはるかに流域の現状を知ることができた。今後も継続していくことにした。

■球磨川治水協議会へ意見書を提出

5月14日、球磨川治水協議会への意見書を熊本県庁に提出した。概要は、球磨川流域で命に関わる災害は、過去においても現在も山地崩壊や土石流に起因している。山地の荒廃が川の通常の水位を減少させ、代わりに土砂で川を埋め尽くしている。山と川は一つの自然として存在していることを無視し、洪水をダムと連続堤防で制御しようとする治水対策は結果的には災害を拡大するものでしかない。

■第7回「川に学ぶ」学習会・現地見学会



球磨大橋付近 2019.5.19

5月19日、くま川ハウスで学習会を開き、川が育んだ人吉盆地の地形や土地利用、そして連続堤防は川と流域住民に何をもたらしてきたのかを学んだ。その後、錦町の球磨大橋付近や球磨川と川辺川の合流点付近など堤防が連続していない場所を歩きながら「堤防とは何か」の議論を深めた。

●会計報告(2018. 1. 1~2018. 12. 31)

収入の部	金額	備考
繰越金	19,725	
年会費・カンパ	332,491	
合計	352,216	

支出の部	金額	備考
郵送費	60,242	会報発送、資料発送
交通費	29,000	意見書提出等高速料金、ガソリン代
事務用品費	6,122	紙代、印刷機使用費他
事務所維持費	120,000	家賃(電気代含)
その他	30,554	慶弔費、インターネット使用料他
合計	245,918	

(収入) 352,216 - (支出) 245,918 = 106,298

◇当会は設立以来26年間、皆様方の会費とご寄付のみで運営しております。今回、2019年度分の年会費払込用紙(一口1000円)を同封させていただきました。今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

球磨川治水対策協議会 国交省が10案を提示

報道によると、川辺川ダムに代わる球磨川水系の治水対策を国と県、流域市町村が検討する「球磨川治水対策協議会」の第9回会合が6月7日に人吉市であり、国交省は球磨川を6区間に分けて複数の対策を組み合わせる10案を提示しました。相変わらず開催は住民に伝えられず、今回は傍聴さえできませんでした。

国土交通省のホームページに掲載された資料を見ると、人吉市は「引き堤」、球磨川川辺川の上流部は「河道掘削」するなど複数の対策を組み合わせた案を提示しています。しかしそれら10の組み合わせ案は、いずれも過大な洪水を前提とした過大な治水対策案です。その中には、人吉市の市街地を100mも川幅を広げる「引き堤」案や、美しい川辺川の自然の護岸を丸ごと破壊してコンクリートの堤防にする案も含まれています。そのような過大な治水対策を住民は望んでいないし、容認できるものではありません。

示された10案は流域市町村が持ち帰って意見をまとめ、その結果を踏まえて国交省九州地方整備局長や蒲島郁夫知事、流域首長らのトップ会議で検討するとのことでした。

緒方俊一郎先生の赤ひげ大賞受賞をお祝いする会



祝賀会での花束贈呈 2019.6.9

手渡す会の共同代表である緒方俊一郎さんが、第7回日本医師会赤ひげ大賞を受賞され、6月9日に相良村の「ラルゴの森」で受賞をお祝いする会を開きました。「ヒトの健康・自然の健康」との演題で講演していただきました。実は手渡す会発足の年である1993年に、緒方俊一郎編著で同じ題名の本が出版されています。この本は「人間も自然の一部である」という理念で貫かれています。これは手渡す会の基本理念その

もので、今回の講演もその理論が貫かれていました。村の医師としての自分史を中心に語られ、「戦争は人間破壊であり、自然破壊である」はいつまでも心に留め置きたい言葉です。緒方先生、受賞おめでとうございます。

編集後記 2月24日、熊本県最高峰の国見岳頂上近くの川辺川の源流地点に初めてたどり着きました。はじめはマタロク谷から入渓して川辺川をさかのぼったのですが、素人では危険と判断し1時間程で断念。国見岳の登山口まで引き返して頂上まで登り、北西方向に下りたところようやく源流地点にたどり着きました。手渡す会が四半世紀以上をかけて取組んできた清流を守る活動。その源流点にようやくたどり着き、感無量でした。全行程8時間。川辺川源流の水は甘露でした！（N.O.）